
美形の彼に一目ぼれ

加藤 大樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美形の彼に一目ぼれ

【Nコード】

N5183F

【作者名】

加藤 大樹

【あらすじ】

主人公水城加奈は屋上で寝ていた美形男子に恋をしてしまうラブコメディー

第一話 素顔

私、水城可奈みずきかな十六歳の高校二年生は、今日ある男性に一目ぼれしましたその出来事は約二時間前にさかのぼります、昼休み私のお気に入りの場所屋上につくと一人の男性が横になって寝ていた私は気になってその人の近くにこっそりと行くと私はその人の顔を見てカッコイイ人だなーと眺めているとドキドキし始めてすぐにそれが恋だと分かった、するといきなりその男性が目を覚まし私が何か言い訳しようとする。

「お前、俺が誰か分かるか？」

きれいな低い声でいきなり喋りかけてきたのでおどおどしながらも。

「さ、さあ、知りませんけど、何ですか？」

私はあまり敬語とかは使わない方だったけど一応初めて会う人なので一応使つと男性の方も敬語で。

「そうですね、ならいいんです、あと一つ言つときますけど俺の事を探そうとしないでください水城さん」

そう言つて彼は走つて行つてしまった「てか、何で私の名前知つてるの？」という疑問もあったがそんな事はきにせず私は、「やるな」と言われるとやりたくなつてきてしまう性格ださしそれが一目ぼれした相手となつたらよけいに探したくなつてきてしまい探す事にした、すると本が一冊置いてあるのが分かった、さっきの人が忘れて行つたのだろうそう思いこの本を返すために探したという事にしようそう思いつき本格的に名前も知らぬ人を探す事にした。

〜放課後〜

私に通つてるこの高校は少し変で誰が考えたが分からないがモテモテランキングというポスターに男子、女子別々に在校生徒一人残

らず投票でランキングづけされていた（写真つきで）、ちなみに私は毎月トップ10に入る美女である、だからあんな美形のカッコイイ人はのってるはずと思って見て見たけど何処にもものっていないかったつい口にだして。

「な、なぜ？」

そしたらいきなり背中を軽く叩かれ。

「かな〜何がなぜなの〜」

そう言つて突然現れてのは私の親友の小崎さや（こざきさや）だった、私が屋上であつた事を説明すると。

「そうなんだ〜なら候補の人が一人だけいるよ」

「うそ〜そんな都合いい事があるとは、だ、誰なの」
多少ドキドキしながら聞くと。

「あそこのメガネかけてる久遠加崎（くどうかさき）君」

「え〜え嘘だないないつてあんなダサイ眼鏡つけてるじゃん髪だつてばさばさだし」

「実わね久遠君ある噂があるのよ、あの眼鏡を取るとかなりの美形だよ」

「何でそんな噂が？」

疑問に思つた私が首を横に曲げて聞いてみると

「久遠君中学校眼鏡かけてなくてモテモテつて噂もあるし、あと人間の顔つて顔の全体を見ないと体外の人は美形か分からないじゃん、あと体形も結構良いしね〜」

「そうなんだ〜よし決めた、彼の眼鏡はずしてくる。」

そういつて久遠君のもとに歩いていく時にさやが。

「あんたのそういう堂々とした態度見直すわ〜」

それにピースで返答して、久遠君の前に来ると久遠君の周りで話していた男子が、「あれつて毎回トップ10に入ってる水城さんだ」
そういつていたが無視をして堂々とした態度で。

「ねえ久遠君眼鏡とつてくれない」

すると彼は、見た目は眼鏡かけていておとなしそうなのに堂々と

した態度で。

「いやです」

きつぱりそう言って帰るしたくをして帰ってしまった。

それを追いかけていくと校庭に出てまだ彼をひっこく追いかけていくと何か小さい声が聞こえてきた、耳をすましてみると校庭で野球の練習をしている野球部の人が。

「危ないよけて」

そう聞こえてきて振りかっで見るとボールが自分めがけて飛んできていた、いつもならうまくかわせてた、だが、今は久遠を追いかけるという事に集中してたのでかわせず当たるそう思っ目をつぶると、誰かに引っ張られた感覚はしたが全然痛い感覚がなかった、目を開けてみると久遠がうまく手を引いてくれたのでボールに当たらずにすんでいたのだった、するとその反動で奇跡的に久遠の眼鏡が外れて素顔が思い切り見えた、するとその顔は屋上で寝ていた男性だったのだ

第一話 素顔（後書き）

もしよろしかったら評価や感想をお願いします

第二話 ちよつとした真実

彼、久遠加崎の素顔を知ってからまだ一時間もたっていないかった、すると久遠君は、いきなり止つたので私は彼の背中にぶつかつてしまった。

「ちよ、何でいきなり止まるのよ」

疑問に思つてそう聞くと久遠君は不愉快な顔をして。

「お前もつ俺の家の前なんだけどいつまでつけて来るきだよ、てかきずけよ」

私は何であんなにカツコイイのにダサイ眼鏡つけてカツコ悪そうにみせるのか考えていたからまつたく持つて気がつかなかった。

「へえ〜そうなんだ〜このマンションにすんでるんだ〜」

「うんだからささっさと帰れ！！」

久遠君が笑顔でそう言つていたが私は久遠君がかなり怒つてるのが分かつた。

「じゃあな」

久遠君がマンションのフロアのドアを開けてエレベータにすばやく乗つて逃げようとするのを見て追いかけて行くと、無事に久遠君の家に着くと。

「本当にお願だから帰ってくれ」

真剣な顔をして言う彼を見て急に悪い気持ちになつて帰ろうとする時、ドアが開いて。

「お兄ちゃんお帰りー」

そう言つて小学三年生位の女の子が久遠君にいきなり抱きついたそれを満面の笑みで抱きしめる久遠君を見て少しだけその子がうらやましく思えた。

「その子誰？」

私がそう聞くと舌打ちをして。

「くそ見られたなら仕方ない何でこんなダサイ格好してる理由教

えてやるよ、外で話すのもなんだから入れよ」

私は真面目そうに話す彼を見てちよつと迷ったが家に入る事にした。

「あれ親は、いないの？」

「ああ母さんは咲が生まれてすぐな父さんは・・・知らない今わ俺と咲さきの二人暮らしなんだ、ああ自己紹介がまだだったな咲自己紹介して」

私はお父さんの事を話しを聞こうと思ったがその前に久崎君の足に隠れていた咲ちゃんが出てきて。

「私、久崎咲って言います9歳です、よろしく」

少しおびえていたけどその所が可愛くてたまらなかった、すると私と全然違う態度で咲ちゃんに笑顔で。

「咲そろそろ好きなアニメ始まるよ見てきて良いよ」

「うん、お兄ちゃん」

そう言っ走って行く咲ちゃんを見ていやみったらしく。

「咲ちゃんの前ではいいおにいちゃんを演じてるんだ」

「ああ、咲は絶対守らなきゃいけない人だからな」

「え・・・それってロリコンですか？」

「ふざけるな、今からその理由教えてあげるから今から話す話と俺の事人にばらしたらお前でも容赦しないからな」

「う、うん」

かなり深刻そうに詳しく説明してくれた。

「お前俺の顔見てどう思う？」

「そりゃーかなりもてるでしょう」

「そうなんだよ、そのせいで咲はつらい目にあってきたんだ」

「え、何で？」

「咲が俺に抱きついたので見て、多少咲がうらやましく思っただろ？」

私が素直に言うべきか言わぬべきが思ったが彼の真剣な顔を見て素直に言う事にした。

「少しねづらやましく思った」

「お前は素直だな」

そう言つて久遠君は、初めて私に素直に微笑んでくれたと思つて嬉しかった、話は続き。

「そうやつて妬む奴も増えてきて咲直接文句言つたり何かする奴も出てきてそれを約半年も咲は俺に心配かけまいと黙つてたんだよ、それを知つた俺はあまり知り合いのいないここに引越してきて二度と同じ事がおきないようにダサく見えるようにしたんだ、これがすべての理由だよ、つておい水城何で涙目になつてるんだよ」

私はきずかぬ間に泣いてしまつていた、すると久遠君が頭を「ポン」となでて。

「お前つて変わつてるな」

「あの二つ気になつただけけどこの町で久遠君の素顔知つてる人いるの？」

「ああ、二人いるよ加島龍平と坂井みこ（かしまりゆうへい）の二人だよ」

私は驚きが隠せなかつたなぜかという二人とも学校内では有名な人であつた加島龍平は大金持ちでランキングでは三位にはいつている坂井みこはランキングで一位でかなりもてるそれに大金持ちで皆が憧れる存在の二人だつた。

「何驚いてるんだよ？」

「いやだつてあの二人だよ二人と知り合いだなんてすごいよじゃあもう一つの気になる事聞くよ、マンションの代金どうしてるの？」

「それはな、加島と坂井がこのマンションの料金払つてくれるんだよ、出世払いということにしてるけど……」

「へえ、そんなんだなんて……いやいや」

何で二人は久遠君に何でそこまでするのか聞いてみようと思つたけど本人も知つてなさそうだから聞くのをやめた。

「なんだよ、ま、いいけど、もう六時半だなどうする」飯でも食つていくか？」

「うん、食べていく」

「じゃあ咲と遊んでてくれ」

（三十分後）

私は咲ちゃんとすっかり仲良くなっていた。

「ご飯できたぞ〜今日は咲が大好きなハンバーグだからな」
すると咲ちゃんが笑顔で。

「ありがとうお兄ちゃん」

それお見て私は久遠君って咲ちゃんの前ではいい兄を演じてるんだな〜そう思った。

帰るとき咲ちゃんは私の手をにぎって「また来てね」笑顔でそういつてくれたどうやらなつかれてしまったらしいその咲ちゃんを見て久遠君は。

「また来てくれよ」

そう言ってくれた、そのおかげで私の中では喜びに満ちていた。

第二話 ちよつとした真実（後書き）

まだ全然素人なので評価や感想、アドバイスを書いてくれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5183f/>

美形の彼に一目ぼれ

2010年12月18日02時25分発行